
ホロ苦アイス

野脇幸菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホロ苦アイス

【Zマーク】

Z9955F

【作者名】

野脇幸菜

【あらすじ】

おせち料理に飽きてコンビニにアイスを買つにきたら…。

元旦が明けた2日すでにお節料理には飽きていた。

こんな正月を過いすのももう何年だらうか。

毎年帰省するのも面倒だが、お盆に帰つてこない分、親は口つるさへ帰つてくるよつよせかすのだった。

なので正月へりこには帰つてくるよつよしていが、就職すれば帰省せずにすむよつよて言つて訳できるだらう。

寒いなあ。雪でも降るかもな。

そんな中、体といふか舌はアイスを要求していた。

正月の塩辛い料理やじきそつて舌が飽きてしまつたらし。

冬に向度かアイスが食べたくなつて食べるのだが、食べ終わる頃には寒さと甘さの限界に苦しめられる。

コンビニに入るとお節料理や餅に飽きたと思われる客がカップめんや菓子に手を伸ばしていた。

アイスのコーナーの前に来ると並べたてのよつよな状態だった。

夏には底が見えてくるほど減つていて、もつと多く仕入れだけよと思つただが。

冬はこの状態、仕入れすぎだよ。

寒さで買いつのを少し躊躇しそうになつたが、塩辛い食べ物や酒に飽きた舌がやうはさせてくれなかつた。

買つものは決まつていた。サクッとした最中の市販のアイスの中では高めのものに手を伸ばした。

バイトを始めるに値段を気にして買つていたのが嘘のように高めのお菓子に手を伸ばすのだった。

「鈴木くんじゃない？」

「え？」

後ろを振り返ると同じ年くらいのかわいい女の子が立つていた。

髪は肩くらいで軽くパーマがかけてあって白い肌にピンクのチークがほんのりとのつっていた。

まじまじと見つめて記憶の中から三秒ほどじて掘り出した。

「広瀬？」

「そうだよ。ぱっと見すぐにわからなかつた？ そんなにあたし変わつたかな。私はすぐにわかつたよ。久しぶり。今どこの大学行つての？ それとも就職した？」

広瀬はハイのスイッチが入つたらしくテンション高く話し始めた。

そして、それはもちろん自分にも当てはまっていた。

「大阪の大学に行ってて正月だから実家に戻ってるんだ。中学から全然会つてないよな。びっくりしたよ。急に誰か話しかけてくるから。広瀬は今どうしてるの？」

「あたしも大学生だよ。東京の大学に行ってるんだ。ホント中学から会つてないよね。クラス会とかも何回か会つたけど鈴木くんとクラス違つたし。部活の集まりも無かつたしね。それとも私たち女子マネージャーは外してやつてるわけ？」

「やつてねーよ。俺ら別に強いチームじゃなかつたから、あんま連帯感無かつたからな。集まりとかしてないんだよ。」

「今度やろーよ！みんな集まつてやあ。」

「集まるかなあ？」

「そこ」は鈴木君が何とかしてよ。」

「広瀬やれよ。」

「あたし原君と浜ちゃんくらいにしか卒業して部員で会つてないなあ。元気だつた？」

「

「原は同じ高校だつたから割と会つてたけど、浜さんは会つてないなあ。元気だつた？」

「うん。あたしが会つたのは高校のころだけもう就職してるらしいよ。浜さんが社会人だよ。」

「社会人かあ。俺まだこれからなる実感さえねーよ。知つてゐる金沢なんか結婚したんだよ。」

「えーそつなんだ全然知らなかつたよ。できちやつたから?」

「わいりじこよ。」

「パパじやん。」

想像すると二人とも笑つていた。

それくらい金沢は結婚を想像できるような顔でも性格でも無く、誰よりも早く結婚するとは思えない人物だつたからだ。

「何買うの?..

「アイス。」

「アイス?こんなに寒いのに?..

「食べたいからだよ。」

「アイスねえ。ちょっと待つてて。あたしもすぐ買つから途中まで
だけど一緒に帰ろうよ。」

「わかつた。」

「アイスねえ。冬にねえ。」

と繰り返しながらお菓子売場に向かってこくで

「ひめせーよ。」

と聞こえるように言ひ返してやつた。アイスを買つて雑誌売場で表紙に目を通していた。

「あん待たせて。」

「おー。」

「パンパニを出ると寒さが増してこた。」

広瀬はマフラーをきつめ巻き直していた。

「よく部活の帰りに一人で買い食いしながら帰つたよねえ。」

「だよなあ。あの頃はとにかく何か食つてたよ。」

「わうわう。あたしなんか顔パンパンだつたし。」

「そんなこと無かつたよ。」

「ホント? 気いつかっちゃつて。」

「眉毛はひじかつたけどな。」

「あーそれは言わないで。」

「カクカクしてたよな。」

「やめてえ恥ずかしい。あの頃はまだ形が定まってなかつたの。そ
んなとこ覚えてなくていいから。」

広瀬は眉毛を隠しながら顔を真っ赤にしていた。

広瀬とは同じ部活で、帰りの方向も同じだつたためよく一緒に帰つ
ていた。

何故かどこか気があつて楽しかつた。

そしてその頃、俺は広瀬のことが好きだつた。

広瀬は明るい性格でいつも笑つて、誰の懷にもすっと入り込めるや
つだつた。

中学3年の夏休みに入る前の部活帰りに、俺は広瀬に告白しようと
決めていた。

部活を終えての帰り道、俺たちはこのコンビニに立ち寄つた。

広瀬はイチゴ味のかき氷のカップを買って、俺は少し贅沢して夏だ
け置いてあるソフトクリームを買った。

2人とも汗を拭きながら、重い足取りで帰つていた。

俺は暑さだけではなく、告白しなければならないという緊張感があ
つて、さらに足取りは重かつた。

タイミングを伺いながら、ソフトクリームを舐め始めた。

ドクン・ドクン・と心臓が高鳴つて暑さからではない汗が体中からふきだしていた。

「なんか今日暗くない?」

「わづか?」

「あんまり喋らないね。」

「疲れたからな。」

「わづかよねえ。あいつこんなに暑いのに練習メーラーいつも通りにせりせて、休憩も少なかつたもんね。」

「だよな。加減してくれればいいのにな。」

また、沈黙になった。勇気が出せない俺はソフトクリームをすすめて広瀬がいると言つたら、告白しようとしたが浮かんで、それに賭けた。その時は少しでも自分の気を紛らわせたかったのだろう。

「広瀬アイスクリームいるか?」

「えつ、そんなのいるない。」

告白できない。

俺はショックを受けてしまった。

断られたからではない。

広瀬の考え方、今まで見た中で一番冷たい表情と声のトーン。それが俺の心を碎いた。

気にならないような断り方だつたら、俺はその後にでもタイミングをはかつて告白していただろう。

というよりも告白しようとしていたため、余計オーバーに冷たく感じ、ショックを受けたのかもしない。

それに、俺は広瀬も俺の事を好きだと思つていた。

そんな自分の自信が無くなつて、自分の中の味方がいなくなつたらかもしれない。

アイスクリームはただ冷たさを感じるだけになつた。

俺は告白を諦めた。

その後の、沈黙の帰り道は思い出したくもない。

それから部活帰りに、広瀬と帰らなくなつた。勝手に自分で気まずく感じて、部活が終わるとすぐにダッシュして帰つていた。

部活はやがて引退になり一年生に取つて代わられ、広瀬とは顔を会わせる事もなくなつた。

「鈴木君？」

「えっ？」

「ボーッとしてたよ。」

「わうか？」

「時々、変なときあつたよね。」

「そんなことねーよ。」

「今度ちやんと集まろーね。」

「嫌だよ。」

「ハツハツいいじゃん。あつ！じやーね鈴木くん。駅にパパが妹を迎えてきたから、ついでに付いてきたの。ここでお別れ、元氣でね。」

「ねえ。」

「あつそれと中学の時、あたし鈴木のこと好きだつたんだよ。今は彼氏いるナビね。じやね！」

そう言つと広瀬は駅に停めてある車に向かって走つていった。

広瀬は全然変わつていない。

付き合つていたならびんなによかつただらうか。

ひ弱な中学の時の自分に嫌気がさした。

もつと俺、あの時頑張つとけよ。

歩きながら俺は暑くなっていた。

なんか恥ずかしい。

アイスを取り出して食べた。

いつもよつとうらこ甘く感じたが美味しい。

雪も降つてきたが、体はポカポカしていた。

携帯が鳴つた。

大学の彼女からだつた。

「今何してんの?」

「アイス食つてる。」

「こんな寒いのに?」

「うわーはみひ。」

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。このへりこで
諦めるかとも思いますが、思春期の頃の勇気の無むと傷つきやむと、
そして今ではそんな自分をアホらしく思ひ姿を描いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9955f/>

ホロ苦アイス

2010年12月1日07時13分発行